

近現代の位牌の形態と流通

The Form and Distribution of Memorial Tablets in Modern Era

山田慎也

YAMADA Shin'ya

はじめに

- ① 位牌に関する先行研究
- ② 一般に使用される位牌の形態
- ③ 東京を中心とした位牌の流通とその特徴
 - ④ 昭和期東京の位牌
 - ⑤ 関西における位牌の形態
 - ⑥ 戦前期の関西の位牌
- ⑦ 関東の近世から明治大正期の位牌
 - ⑧ 位牌への写真の融合
- ⑨ 近現代の位牌の特徴とその変化

【論文要旨】

本報告は、近現代における位牌の形態と流通の様相を検討することを目的としている。死者祭祀の場として仏壇は重要である。これは仏壇に本尊となる仏、菩薩を祀るだけでなく、死者の位牌を祀ってきたからであり、人々の生活の中にも浸透している。死者を表象する位牌は、重要な役割を果たしてきたが、その研究はあまり進んでおらず、特に現在一般的に使われている位牌についての実態についてはとくに関心を払われてこなかった。そこで、本報告では仏壇、仏具業者のカタログをもとに、その形態の特徴と変遷について検討を行った。現在では、家具調仏壇などの普及により新たなデザインの位牌が次第に多くなっているが、従来主流であった位牌の形態である、「春日」やそれに連関する「勝美」、「葵角切」は歴史的にはあまり古くまで遡るものではないこと、そして関東を中心に発達し、全国的に展開していったと考えられる。戦前期から戦後は、むしろ「猫丸」や「半猫丸」などのバリエーションが中心的であった。一方、京都を中心とした関西から中京圏にかけては、戦前期において「春日」は登場せず、「二重座」、「三重座」や「五重座」といった、台座部が比較的シンプルな形から層を重ねるものが基本となっている。そして現在関西を中心に全国的に普及している「千倉座」や関西で主流の「中台」も「三重座」のバリエーションである。こうして、位牌の形態は近代以降関東と関西で異なる展開があったと考えられ、それぞれ使用されてきたが、近年の情報流通の展開によってこうした地域性も次第になくなっていくことが明らかとなった。

【キーワード】 位牌、仏壇、死者儀礼、流通、写真